

邯鄲 詞章

急ぎ候ほどにこれははや、邯鄲の里とかや申し候。今夜はこの所に旅宿しようずるにて候。

いかにこの内へ案内申し候」

アイ 「案内とは誰にて渡り候ぞ」

シテ 「これは旅人にて候。一夜の宿を御かし候え」

アイ 「やすき間の御事にて候。こうこう御通り候へ。

まずこれへお腰をめされ候え。

いかに申し候。見申せば独りお旅人と見え給いて候が、何国より何方へ御通りなされ候ぞ」

シテ 「これは蜀の国より楚国、羊飛山へ参る者にて候」

アイ 「それはなに故、羊飛山へは御急ぎ候ぞ」

シテ 「われ人間にあり乍ら仏道をも願わず、ただ茫然とあかし暮す処に、楚国の羊飛山に尊き智識のまします由聞き及びて候ほどに、身の一大事をも尋ねばやと思ひ立ちて候」

アイ 「これははるばるの御旅にて候。さてわらわは、いにしえ仙の法を行い給う御方に、

お宿を参らせて候えば、お宿の為とて邯鄲の枕と申すを給りて候。これをめして一睡御まどろみあれかしと存じ侍う」

シテ 「さてその邯鄲の枕とやらんはいづくにござ候ぞ」

アイ 「あれなる大床なるが邯鄲の枕にて候」

シテ 「さらば立ちこえ一睡みうずるにて候」

アイ 「わらわはその内に粟のおだいをこしらえ

候べし。やあやあ、お旅人の御泊りある間、粟のおだいをこしらへさむらえや」

シテ 「げにげにこれは聞き及びし邯鄲の枕なるべし。これはことさら門出の、世のこころみに夢の告、天の与うる事なるべし。ひと村雨の雨宿り」

地謡 「ひと村雨の雨宿り、日はまだ残る中宿の、仮り寝の夢を見るやと、邯鄲の枕に伏しにけり。邯鄲の枕に伏しにけり」

ワキ 「いかに盧生に申すべき事の候」

シテ 「そもいかなる者ぞ」

ワキ 「楚国の帝のおん位を、盧生に譲り申さんとの、勅使にこれまで参りたり」

シテ 「思いよらずや王位には、そも何故に備わ

るべき」

ワキ 「是非をばいかではかるべき、おん身世を

持ちたもうべき、その瑞相こそましますら

め。時刻うつりて叶うまじ。はやおん輿に

召さるべし」

シテ 「こはそもなにと夕露の、光かかやく玉の

輿、乗しも習わぬ身のゆくえ」

ワキ 「かかるべしとは思わずして」

シテ 「天にもあがる心ちして」

地謡 「玉のみ輿にのりの道、栄花の花も一時の、

夢とは白雲の上人となるぞ、ふしぎなる」

シテ 「浮世の旅に迷い来て、浮世の旅に迷いきて、夢路をいつと定めん。(地取)

〔次第〕

シテ 「浮世の旅に迷い来て、浮世の旅に迷いきて、夢路をいつと定めん。(地取)

シテ 「浮世の旅に迷い来て、浮世の旅に迷いきて、夢路をいつと定めん。(地取)

シテ 「浮世の旅に迷い来て、浮世の旅に迷いきて、夢路をいつと定めん。(地取)

シテ 「浮世の旅に迷い来て、浮世の旅に迷いきて、夢路をいつと定めん。(地取)

野暮れ山暮れ里暮れて、名にのみ聞きし邯鄲の、里にも早く着きにけり。里にも早く着きにけり。

着きにけり。

〔真ノ来序〕

地謡 「有難の気色やな。ありがたの気色やな。もとより高き雲の上、月も光は明きらけき、

雲竜閣や阿房殿、光も満ちみちて、げにも妙なる有様の、庭には金銀の砂を敷き、四方の囲めの玉の戸を、出で入る人までも光をかざる粧いは、まことや名に聞きし**寂光の都喜見城**の、楽しみもかくやと思うばかりの気色かな。

(クセ) 千顆万顆のみ宝の数をつらねて捧物、**千戸万戸**の旗のあし、天に色めき地にひびく、礼の声もおびたし、礼の声もおびたし」

シテ 「東に三十余丈に」

地謡 「白銀の山を築かせては、黄金の日輪を出だされたり」

シテ 「西に三十余丈に」

地謡 「黄金の山を築かせては、白銀の月光を出だされたり。たとえばこれは、**長生殿**の内には、春秋富めり、不老門の前には、日月遅しという心をまなばれたり」

ワキツレ 「いかに奏聞申すべき事の候」

シテ 「そも何事ぞ」

ワキツレ 「おん位につきたまいてははや五十年なり。しかれば仙薬をきこし召さば、おん年一千歳まで保ちたもうべしさるほどに、**天の濃漿や沆瀣の盃**、これまで持ちて参りたり」

シテ 「そもそも天の濃漿とは」

ワキツレ 「これ仙家の酒の名なり」

シテ 「沆瀣の盃と申す事は」

ワキツレ 「同じく仙家の盃なり」

シテ 「寿命は千代ぞと**菊の酒**」

ワキツレ 「栄花の春も」

シテ 「万年」

ワキツレ 「君も豊に」

シテ 「民栄え」

地謡 「国土安全長久の、栄花もいやましに、なお喜びは**まさり草**の、菊の盃とりどりにいざや飲もうよ」

シテ 「めぐれや盃の」

地謡 「めぐれや盃の、流れは**菊水の**、**流に引かれて**とく過ぐれば、手まらずさえぎる菊衣の花の袂をひるがえして、**指すも引くも**光なれや、**盃の影のめぐる空ぞ**久しき」

子方 「わが宿の」

地謡 「わが宿の、菊の白露今日ごとに、幾世つもりて淵となるらん。よも尽きじよも尽きじ、葉の水も泉なれば、汲めども汲めどもいやましに出ずる菊水を、飲めば**甘露**もかくやらんと、心も晴れやかに飛び立つばかり**有明**の夜昼となき**楽**しみの、栄花にも栄耀にも、げにこの上やあるべき」

〔楽〕

シテ 「いつまでぞ」

地謡 「いつまでぞ、栄花の声も、栄花の声も、常磐にて、なおいく久し**有明**の月」

シテ 「**月人男**の、舞なれば」

地謡 「雲の羽袖を重ねつつ、喜びの歌を」

シテ 「謡う夜もすがら」

地謡 「謡う夜もすがら、日はまた出でて、明けくなりて、夜かと思えば」

シテ 「昼になり」

地謡 「昼かと思えば」

シテ 「月また**さやけし**」

地謡 「春の花咲けば」

シテ 「紅葉も色濃く」

地謡 「夏かと思えば」

シテ 「雪も降りつつ」

地謡 「四季おりふしは目の前にて、春夏秋冬万木小草も、一時に花咲けり。面白や、ふしぎやな。

かくて時過ぎ頃去れば、かくて時過ぎ頃去れば、五十年の栄花も尽きて、まことは夢の内なれば、女御更衣、百官卿相千戸万戸、**従類眷属**宮殿楼閣、みな消え消えと失せて、ありつる邯鄲の枕の上に眠りの夢は覚めにけり」

アイ 「いかにお旅人、粟のおだいが出来て候。**とうとうおひる**なりさむらえや」

シテ 「盧生は夢覚めて」

地謡 「盧生は夢覚めて、五十年の春秋の、栄花もたちまちに、ただ茫然と起きあがりて」

シテ 「さばかり多かりし」

地謡 「女御更衣の声と聞きしは」

シテ 「松風の音となり」

地謡 「宮殿楼閣は」

シテ 「ただ邯鄲の仮りの宿」

地謡 「栄花のほどは」

シテ 「五十年」

地謡 「さて夢の間は粟飯の」

シテ 「一炊の間なり」

地謡 「ふしぎなりや計りがたしや」

シテ 「つらつら人間の有様を案ずるに」

地謡 「百年の歓楽も命終れば夢ぞかし。五十年

の栄花こそ、身のためにはこれまでなり、
栄花の望みも齡の長さも五十年の歓楽の、
王位になればこれまでなりげに何事も一
炊の夢」

シテ 「南無山宝南無山宝」

地謡 「よくよく思えば出離を求むる、知識はこ
の枕なり。げに有難や邯鄲の、げに有難や
邯鄲の、夢の世ぞと悟りえて望み叶えて帰
りけり」

※ 詞章は金春流謡本によるもので、上演に際し
実際の台詞とは一部異なる箇所があります。

夢路を…迷いの心はいつ覚めるであろうか。旅の目
的地が遠いことも含めている。

貴き知識…高僧を指す。

身の一大事…人生の意義。

そこしもしもなき…見当のつかないような。

野暮れ…野山や里で夜を明かし暮らし。

大床…おおゆか。広庇のことか。

おだい…ご飯。

ひと村雨の雨宿り…実際に雨が降ってきたのではな
く、この宿に泊まるのも前世からの宿縁であると
いう意味。「一樹の陰に宿り、一河の流れを汲む
も、是皆多生の縁」という言葉を引いた。「松虫」
などにも見られる。

備わる…就く。

是非をば…その理由は我々には推し量れない。

瑞相…めでたい人相。

夕露…言ふと夕を掛け、露から玉に連ねた。

乗りも習わぬ…乗り慣れないという意味と、法、す
なわち仏法を勉強していないということ掛けて
いる。

白雲…知らずと白と掛け、白雲とし、雲の上人に連
ねた。雲の上人とは宮中に仕える貴人の総称。

雲竜閣や阿房殿…阿房殿(あほうでん)は秦の始皇
帝が建てた宮殿の名前。雲竜閣は典拠不明だが
「天鼓」でも二つが並立して述べられている。

寂光の都…諸仏の居並ぶところ。

喜見城…須弥山山頂の宮殿。利天主帝釈の居城。

千顆万顆…顆は球状のものを数えるのに用いる。
数々のという意。

千戸万戸…千戸や万戸を領する大名諸侯が旗をな
びかして来朝するという意。

東に…平家物語巻五「咸陽宮の事」にある言葉を修
飾したものと思われる。

丈…明治時代の規定によれば一丈は3.03m。中国
の単位では3.33mとなる。

長生殿の…和漢朗詠集の詩句を引いた。長生殿、
不老門は唐代の帝居の殿門の名前。栄華が永く
続いていることを表す。

天の濃漿…めでたい酒。濃漿は酒の異称。

沈瀝の盃…仙人の盃。沈瀝は仙人が食す夜霧、露。

菊…聞くと掛けた。重陽の節句に菊花の酒を飲む
と長寿を保つといわれる。

まさり草…菊の異名。平安期に歌合せに詠まれた
和歌による。

菊水…長寿を保つ水。「枕慈童」はこれを題材にした
曲。

流に引かれて…和漢朗詠集の詩句。三月三日の曲

水宴に取材した詩。「西王母」や「草紙洗小町」な
ども同じ詩を扱った一節がある。ここでは盃が
次から次へと廻る様を曲水宴に例えた。

指すも引くも…舞で手を前に出したり、手前に引い
たりすること。ここでは光と盃に掛けて言ってい
る。

盃の影…盃を月に見立て、月影の意に転じてめぐ
ると続けた。

めぐる…盃がめぐると、月がめぐるとを掛けた。

わが宿の…拾遺集の和歌。年に一度の重陽の節句
毎に菊の露が滴つて淵となるにはどれだけの年月
がかかるのだろうか。しかし君の御代はそれより
も永いことだ、という意。「羽衣」の「君が代は天
の羽衣まれに来て…」という和歌と同じような
意味になる。ちなみに落語「寿限無」にある「五
却の擦り切れ」はこの「羽衣」に出てくる和歌と
起源が同じ。

甘露…諸神の飲料。

有明の…有明の月とは、陰暦十六日以降、夜が明
けかけても空に残っている月をいう。このことから
夜昼という語の序とした。

月人男…天上の仙人に見立てた。

さやけし…明るい。

従類眷属…一族・家来の総称。

とうとうおひるなり…早くお起きなさい。

一炊…一炊と一睡とを掛けた。

南無山宝…仏法僧の三宝に帰依することから転じ
て、深く感じ入ったときに発する言葉。南無三と
も。

出離…出離生死の略で、生死輪廻の苦を解脱して
悟りを開くこと。